

敬語の意味論

戸次 大介[†] 川添 愛[‡] 片岡 喜代子^{*} 齊藤 学[§]

[†] 東京大学 〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 beki@ecs.c.u-tokyo.ac.jp

[‡] 国立情報学研究所 〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋 2-1-2 zoeai@nii.ne.jp

^{*} 国立国語研究所 〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2 kiyokok@hkg.odn.ne.jp

[§] 帝京大学 〒192-0395 東京都八王子市大塚 359 haksa@main.teikyo-u.ac.jp

1 背景

言語表現には、命題の意味内容の他に、使用できる場面、使用できない場面といった「使用条件」があり、これらは真理条件的意味論では表せない情報であるという意見が散見される。しかし、筆者らは、言語表現の使用条件には、意味論的前提として定式化できるものが少なくないという見通しを持っている^{*1}。本発表では、言語表現の使用条件の例として、尊敬語や謙譲語のような敬語を取り上げ、まずそれらの表現の適格性を、統語素性の一致によって定義することは不可能であることを示したのち、意味論的前提として記述すべきであることを示す。また、使用条件を高階動的論理^{*2}を用いて各語彙の意味表示内において記述することで、合成原理に基づく定式化を行う。

2 敬語と統語論的分析

日本語では、主語^{*3}が発話者にとって目上の人物である場合は、「来る」の代わりに「おいでになる」「いらっ

しゃる」のような尊敬語を用いる。また、目的語が発話者にとって目上の人物である場合は、「言う」の代わりに「申し上げる」のような謙譲語を用いる。また、丁重語、丁寧語では目上の人物が必ずしも文中に現れない。

(1) 敬語の下位分類

- a. 尊敬語：お帰りになる、仰る、等
- b. 謙譲語：お聞きする、伺う、等
- c. 丁重語^{*4}：申す、参る、等
- d. 丁寧語：帰ります、学生です、等

原田 (1972)・Harada (1976) は、変形文法の考え方にに基づき、敬語のうち尊敬語・謙譲語を含む文は、変形操作によって導出されると主張した。まず、「目上の人物^{*5}」を指す名詞句は「SSS 素性^{*6}」を持つものとし、次に、以下のような変形規則を提案した。^{*7}

^{*1} この見通しの背景には、形式意味論の命題、すなわち意味表示を、たとえば話者の知識状態のような、個々人で異なる情報を含みうるものとして定義しようという立場がある。この立場においては、意味論の説明対象が、いわゆる「真理条件的」意味論の説明対象を超えている可能性があるが、その問題は「真理条件」とはそもそも何か、という問題、すなわち言語の「意味」を外在的に規定するか内在的に規定するか、という問題に関わっており、ここでは詳細には立ち入らない。

^{*2} 戸次 (forthcoming, 補遺B) において、組合せ範疇文法 (CCG) の意味論を記述する体系として提案している。

^{*3} ここでは「主語」「目的語」という用語を、少々不正確ではあるが、以下の意味で用いている。すなわち「主語」とは主にガ格名詞句のことであり、位格文では二格名詞句である。「先生には財産がおありになる」等。また「目的語」とは、一ガーフ文ではヲ格名詞句のことであり、一ガーニフ文では二格名詞句である。「太郎は先生に弟をご紹介した」等。

^{*4} 文化審議会 (2007) の用語に従った。菊地 (1994) では「謙譲語」「丁重語」を「謙譲語 A」「謙譲語 B」と呼んでいる。また、原田 (1972) では丁重語は丁寧語の一種に過ぎないとしている。

^{*5} 原田 (1972, p.457) は『「目上の人物」というのは、話し手より「格が上」で、しかも与えられた場面では身内に属さない人物を指すと考えられる』と述べている。すなわち、尊敬語・謙譲語の使用条件は、「格が上」という絶対的観点と、「身内に属する」という場面場面で変わりうる相対的観点の二つを参照するという分析であるが、意味論のレベルでは相対的観点のみで十分である。

^{*6} SSS は “socially superior to the speaker” の意。ただし、SSS がいわゆる統語素性であるか否かについては、原田 (1972)・Harada (1976) とともに慎重な態度を取っている。Harada (1976, fn.16) 参照。HPSG 系の分析では +HON 素性と呼ぶものも多い。Gunji (1987)、Siegel (2000) 等を参照。

^{*7} 動詞の尊敬語には、統語的派生形式「御 + 動詞連用形 + なさる/になる/下さる」の他、「御覧になる」のように連用形のみを入れ替える別語形式と「いらっしゃる」のような完全別語形式がある。また、動詞の謙譲語には、統語的派生形式「御 + 動詞連用形 + する/いたす/申し上げる/いただく/願う」の他、「申し上げる」「伺う」等の完全別語形式がある。ただし、いずれも動詞連用形が 1 モーラになる場合は、統語的派生形式は使用不能である。「*お見になる → 御覧になる」「*お着になる → お召しに

- 主語が SSS である時、用言を尊敬語にする（任意）
- 目的語が SSS である名詞句を含む*8ならば、用言を謙讓語にする（任意）

この分析は、基底構造＝意味表示であった変形文法時代のものであり、統語構造と意味情報が渾然一体となったものであることを考慮に入れなければならない。したがって、後続研究は原田の変形規則がどのような統語論的・意味論的操作に還元されるべきかを検討する必要があると思われる。しかし、生成文法研究においては、原田の観察を十分に咀嚼せぬまま、一致現象 (agreement) に還元しようとする分析*9が続いている。

統語論研究の現状に鑑み、我々の分析を述べる前に、敬語使用の適格性を統語論的一致に還元する分析に対して批判を加えておきたい。実は、「目上の人」であることを表す統語素性を定義することは、統語論の枠組内では不可能なのである。

3 「目上の人」は統語素性として定義可能か

まず確認しておくべきは、与えられた名詞句が SSS 素性を持つか否かは、名詞句の形式自体によって決定されることではない、ということである。たとえば、

- (2) 山田さんがお見えになった。

という文が適格か否かは、「山田さん」の指す対象と発話者の関係によって決まるのであって、「山田さん」という固有名詞自体の性質によって決定されることではない。

では、与えられた名詞句が SSS 素性を持つか否かは、その名詞句が指す対象と発話者の関係によって決まる、と考えることは妥当であろうか。これについても、以下の例を考慮すれば、否定的に考えざるを得ない。

- (3) 誰もお見えにならなかったようです。

この文は、適切な状況を与えれば、適格である。したがって、名詞句「誰も」は SSS 素性を付与されていなければならない。しかし、名詞句「誰も」が指す対象は存在しないので、発話者との関係を考えることはできず、したがって SSS 素性を付与することもできないはずである。

なる」*「お来になる → おいになる」

*8 目的語自体が目上の人を指している必要はない。「山田先生のお宅にお伺いした」「お荷物をお持ちしましょう」等。

*9 Siegel (2000)、Boeckx and Niinuma (2004) 等。Potts and Kawahara (2004) は敬語の意味論を提示しているが、敬語の不適切な使用を制限するものではない。したがって、敬語使用の適格性が、統語論において規定されると暗に仮定している点では、前述の理論と共通しているものと思われる。

このように、与えられた名詞句が目上の人を指すか否かを表すような素性を定義する方法は、少なくとも統語論の範囲では、存在しないように思われる*10。したがって、敬語使用の適格性を、統語的一致現象に還元しようとする諸理論は、いずれも成立し得ないことが分かる。*11

4 敬語と意味論的前提

我々は、当該名詞句が「目上の人」を表していることは、意味論的前提 (presupposition) であると考え*12。そのことを確認するために、我々が戸次・川添・片岡・齊藤 (2006, 2007) の一連の研究で確立した、日本語における前提テストを用いることができる。

- (4) 山田さんがお見えになったわけではない。

山田さんはまだ大阪にいるんだから。

- (5) 山田さんがお見えになったという可能性もあった。

実際には、山田さんはまだ大阪にいるが。

この結果は、山田さんが目上であるという情報が、否定および蓋然モダリティのスコープを越えて投射 (project) することを示しており、したがって意味論的前提であると考えられる。

5 「待遇境界」概念の導入

では、「目上である」とは一体どのような意味論的前提なのであろうか。我々は、ここで「待遇境界」という概念を定義し、敬語とは、談話中に存在する「待遇境界」への直示表現であると主張する。

「待遇境界」とは、談話中の登場人物（発話者、聞き手、主語の指示対象、目的語の指示対象、等）を、「上位集団 (upper group)」と「下位集団 (lower group)」に分ける

*10 これに対して、名詞句が「目上の人」を指す場合に SSS 素性が付与されるのではなく、SSS 素性付与の段階では名詞句の指示対象を考慮せず、SSS 素性が付与された名詞句の意味解釈を制限する、という逆のアプローチもあるかもしれない。しかし、名詞句が固有名詞の場合 (2) と量量子の場合 (3) の両方について正しい予測を出す理論が存在するかは自明ではない。

*11 Boeckx and Niinuma (2004) に対しては、Bobaljik and Yatsushiro (2006) の反論があるが、ここではそれ以前の問題として、「目上の人」という統語素性そのものが定義不能であることを指摘しているのである。

*12 原田 (1972, p.458) は、「敬語は論理的な意味には何ら影響を与えないし、それを使うことがすなわち「目上の人」を尊敬していることの表明となるわけでもない」と述べている。実際、敬語によってそのような表明が主張 (assert) されているわけではない、という点については同意する。

境界のことである。待遇境界には社会的立場が反映されるが、境界は固定されておらず、同一の発話者であっても場面場面で異なる待遇境界を使い分ける場合がある。たとえば、(6)のような発話では、社外の聞き手に対して、社内での発話とは異なる「待遇境界」が用いられており、「上位集団」に聞き手を、「下位集団」に発話者と社長を置いていると考えられる。

(6) 社長はまだ来ておりません。

形式的には、「待遇境界」は以下のように定義される。^{*13}

Definition 5.1 (待遇境界). 関数 *boundary* : *et*, *animate* : *et*, *up* : *e(et)*, *low* : *e(et)* は、以下の性質を満たす。

1. Domain of up/low

$$\forall b(\text{boundary}(b) \leftrightarrow \exists x(x = \text{up}(b) \wedge x \neq \emptyset))$$

$$\forall b(\text{boundary}(b) \leftrightarrow \exists x(x = \text{low}(b) \wedge x \neq \emptyset))$$

2. Codomain of up/low

$$\forall b \forall x(x \in \text{up}(b) \rightarrow \text{animate}(x))$$

$$\forall b \forall x(x \in \text{low}(b) \rightarrow \text{animate}(x))$$

3. Disjointness

$$\forall b(\text{up}(b) \cap \text{low}(b) = \emptyset)$$

文の、話し手・聞き手・主語・目的語を各々 *spk*, *hrr*, *sbj*, *obj* と記すことにすると、敬語の持つ意味論的前提は、「待遇境界」概念を用いて、以下のように表すことができる。

Definition 5.2 (敬語の意味論的前提).

$$\text{sonkei}(b, \text{spk}, \text{sbj}) \stackrel{\text{def}}{\equiv} \{\text{spk}\} \subseteq \text{low}(b) \wedge \{\text{sbj}\} \subseteq \text{up}(b)$$

$$\text{kenjoo}(b, \text{spk}, \text{sbj}, \text{obj}) \stackrel{\text{def}}{\equiv} \{\text{spk}, \text{sbj}\} \subseteq \text{low}(b) \wedge \{\text{obj}\} \subseteq \text{up}(b)$$

$$\text{teityoo}(b, \text{spk}, \text{hrr}, \text{sbj}) \stackrel{\text{def}}{\equiv} \{\text{spk}, \text{sbj}\} \subseteq \text{low}(b) \wedge \{\text{hrr}\} \subseteq \text{up}(b)$$

$$\text{teinei}(b, \text{spk}, \text{hrr}) \stackrel{\text{def}}{\equiv} \{\text{spk}\} \subseteq \text{low}(b) \wedge \{\text{hrr}\} \subseteq \text{up}(b)$$

共通点は、話し手は常に *low(b)* に属していることである。すなわち、敬語を使用するということは、話し手を低く置く、ということに他ならない。

^{*13} すなわち、待遇境界 *b* には *up(b)* および *low(b)* という集合が必ず存在し、それらのメンバーは有生であり、*up(b)* と *low(b)* に共通のメンバーは存在しない。

6 敬語使用条件の語彙化

さて、戸次 (forthcoming) では、CCG と高階動的論理を用いた文法記述体系を提案している。それに基づいてここまでの議論を定式化すると、尊敬語「仰る」の語彙項目は以下のように与えることができる。^{*14}

$$(7) \frac{\text{仰る}}{S_{\text{term}} \setminus NP_{ga} \setminus NP_{ni} \setminus NP_o} : \lambda z. \lambda y. \lambda x. \lambda e. \rho b. \partial(\text{sonkei}(b, \text{spk}, x)); iu(e, x, y, z)$$

一方、「申し上げる」のような謙譲語、「申す」のような丁寧語についても、以下のように前提を用いて書き分けることができる。

$$(8) \frac{\text{申し上げる}}{S_{\text{term}} \setminus NP_{ga} \setminus NP_{ni} \setminus NP_o} : \lambda z. \lambda y. \lambda x. \lambda e. \rho b. \partial(\text{kenjoo}(b, \text{spk}, x, y)); iu(e, x, y, z)$$

$$(9) \frac{\text{申す}}{S_{\text{term}} \setminus NP_{ga} \setminus NP_{ni} \setminus NP_o} : \lambda z. \lambda y. \lambda x. \lambda e. \rho b. \partial(\text{teityoo}(b, \text{spk}, \text{hrr}, x)); iu(e, x, y, z)$$

7 本分析の帰結

敬語表現の背景にある日本社会では、「目上」「目下」という関係について、細かく段階分けされた階層が存在している。しかし、敬語の使用において話者が念頭においているのは、そのような階層の全体像ではなく、階層中の境界の一つである。敬語とは、そのような境界線の一つに対する直示表現である、というのが本稿の主張である。

この主張には、以下に述べるような帰結がある。

7.1 一人称主語と尊敬語

「私が仰いました」のような文は、常に不適格であることが説明される。尊敬語の前提は、 $\{\text{spk}\} \subseteq \text{low}(b)$ かつ $\{\text{sbj}\} \subseteq \text{up}(b)$ であるが、一人称主語の文においては $\text{spk} = \text{sbj}$ であるから、Disjointness に反している。したがって、文の前提が満たされることはあり得ないのである。

^{*14} *S_{term}* における素性 *term* は終止形 (terminal form) を表す。また、 $\rho b. \phi$, $\partial(\phi)$, $\phi; \psi$ は動的意味論の命題であり、それぞれ「*b* が先行文脈に存在して ϕ を満たすこと」「 ϕ が前提であること」「 ϕ かつ ψ であること」を表す (戸次 (forthcoming, 補遺 B) 参照)。なお、*spk*, *hrr* は contextual parameter として定義する必要がある。

7.2 丁寧語と丁寧形

「申す」「参る」「ござる」のような丁寧語は、「目上の人」が文中に現れる必要がないという点において、謙讓語とは異なる。

- (10) a. 私の弟がゆうべ東京に参りました。
 b. その時母は私にこう申しました。
 c. 私が田中でございます。

丁寧語は、現代語においては常に丁寧形「ます」を伴うことから、原田 (1972, p.456) では「丁寧語の一種にすぎない」とされている。しかし、「必ず丁寧形で述べられる」ということと「丁寧語である」ということは、必ずしも同一である必要はない。

一方、本分析では、丁寧語は以下の前提を持つ。

$$\{spk, sbj\} \subseteq low(b) \wedge \{hrr\} \subseteq up(b)$$

ところが、この前提は、丁寧語の前提である

$$\{spk\} \subseteq low(b) \wedge \{hrr\} \subseteq up(b)$$

を含意している。もし、非丁寧形の前提が、丁寧形の前提の否定 $\neg(\{spk\} \subseteq low(b) \wedge \{hrr\} \subseteq up(b))$ であると考えれば、丁寧語を非丁寧形で述べることによって、互いの前提が矛盾することになる。したがって「必ず丁寧形で述べなければならない」という丁寧語の性質は、本分析の帰結として説明されうるものである。

7.3 〈連用形〉+あそばす

尊敬語のなかには、「お帰りあそばす」のように、尊敬の度合いが通常の尊敬語より高いものがある。本分析では、このような尊敬語の前提と通常の尊敬語の前提の違いを、以下の $hyper(b)$ のように、待遇境界への修飾によって表すことができる。^{*15*16}

$$(11) \frac{\text{あそばす}}{S_{term} \setminus NP_{ga} \setminus S_{cont}} \\ : \lambda P. \lambda x. \lambda e. \\ \rho b. \partial(\text{sonkei}(b, spk, x); hyper(b)); Px$$

7.4 侮蔑語の使用条件

本分析では、敬語以外の待遇表現についても同様に扱うことができる。たとえば侮蔑語については、以下ののように、尊敬語とは逆の前提を持つと考える。

$$bubetsu(b, spk, sbj) \stackrel{def}{=} \{spk\} \subseteq up(b) \wedge \{sbj\} \subseteq low(b)$$

^{*15} 本分析における「境界線」の扱いは、イベント意味論におけるイベントの扱いに通じる。

^{*16} S_{cont} における素性 $cont$ は連用形 (continuative form) を表す。

参考文献

- Bobaljik, J. and K. Yatsushiro: 2006, 'Problems with Honorification-As-Agreement in Japanese: A Reply to Boeckx & Niinuma'. *Natural Language and Linguistic Theory* 24(2), 355–384.
- Boeckx, C. and F. Niinuma: 2004, 'Conditions on Agreement in Japanese'. *Natural Language and Linguistic Theory* 22, 453–480.
- Gunji, T.: 1987, *Japanese Phrase Structure Grammar: A Unification-based Approach*. Dordrecht: D. Reidel.
- Harada, S.-I.: 1976, 'Honorifics'. In: M. Shibatani (ed.): *Syntax and Semantics 5*, Vol. 499–561. New York: Academic Press.
- Potts, C. and S. Kawahara: 2004, 'Japanese honorifics as emotive definite descriptions'. In: K. Watanabe and R. B. Young (eds.): *SALT 14*. Ithaca, NY, pp. 235–254, CLC Publications.
- Siegel, M.: 2000, 'Japanese Honorification in an HPSG Framework'. In: *PACLIC 14 : 14th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*. Waseda University International Conference Center, Tokyo, Japan, pp. 289–300, PACLIC 14 Organizing Committee.
- 菊地 康人. 1994. 「敬語」, 角川書店.
- 原田 信一. 1972. 「敬語の規則について」, 『英語文学世界』(1972) 8月号, p.16-19, 英潮社.
- 文化審議会. 2007. 「敬語の指針 (答申)」, http://www.bunka.go.jp/1kokugo/pdf/keigo_tousin.pdf
- 戸次 大介. forthcoming. 「日本語文法の形式理論—活用体系・統語構造・意味合成—」, p.1-259, (日本学術振興会平成20年度科研費補助金「研究成果公開促進費(学術図書)」に申請中)
- 戸次大介, 川添愛, 片岡喜代子, 齊藤学. 2006. 「日本語における前提テストの再考」, 電子情報通信学会技術研究報告 Vol.106 No.164 TL2006-7~13 [思考と言語], pp.1-8, 東京大学.
- 戸次大介, 川添愛, 片岡喜代子, 齊藤学. 2007. 「日本語の叙實的従属節導入表現における前提と話者の知識状態」, 言語処理学会第13回年次大会発表論文集. p.322-325. 龍谷大学.